

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520512

研究課題名(和文) 古代日本語述語形式における語彙と文法の交渉に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Relationship Between Lexicon and Grammar in Predicate Forms in Ancient Japanese

研究代表者

仁科 明 (NISHINA, Akira)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：70326122

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、古代日本語について以下の三点を論じた。第一は、これまで理論的な位置づけが明確とはいえなかった述語形式の位置付けである。大きく二種に分ける理解を提案し、そのうちの一種(アスペクト及びパーフェクトに関わるもの)が動詞語尾との強い関連(歴史的・原理的な連続性)を持つ点で、ヴォイスに関わる形式と共通点があることを示した。第二は、「文法化」研究のあり方の検討である。「けり」を中心に、述語形式の意味変化と体系とのかかわりの問題を検討した。第三は、動詞基本形の問題である。アスペクト形式(「つ」「ぬ」)が持つ用法の広がりとのかかわりについても見通しが得られるような、基本形の理解を追究した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I examined the following three points. The first was the clarification of the positions of predicate forms in Ancient Japanese, which have been unclear in previous studies. I suggested two broad groups of predicate forms in Ancient Japanese; of these, one type (related to aspect and the perfect forms) has a strong relationship (indeed, a historical and fundamental continuity) with verb endings, showing a commonality between forms that is related to voice. The second was the examination of the current state of studies on "grammaticalisation" of predicate forms. I examined the problem of the relationship between changes in meaning and the whole predicate system, with a focus on "-keri". The third was the examination of the issue of the basic form of verbs. I performed an investigation into the understanding of this in order to obtain an insight into their relationship with the breadth of uses of aspectual forms ("-tsu" and "-nu").

研究分野：日本語学・日本語史

キーワード：述語体系 古代日本語 文法変化 文法カテゴリ

1. 研究開始当初の背景

1.1. ヴォイス形式の扱い

日本語で助動詞として扱われてきた形式（本研究では山田 1908 などにならって「複語尾」という用語を用いた）のうち、ヴォイスに関わる「(ら)る」「(さ)す」が他の形式とは大きく異なることは長く認識されてきた。これらの形式は、他の複語尾と異なり、動詞に下接した際に、動詞と結びつく名詞の格の振り分けや意味を変える。また、話し手による内容の把握とも言い難い。山田孝雄『日本文法論』(1908)で、他の複語尾が「統覚の運用を助くる」ものとされるのに対して、「属性の運用を助くる」ものと位置づけられたのも、この点に関わろう。だが、このような相違点の認識がもっとも明確な形で表明されたのが、時枝誠記『日本文法 文語篇』(1954)であった。上述のような点を重視し、「(ら)る」「(さ)す」などを、他のものに対して接尾語として位置づけたのである。現在も、このような扱いを踏襲する論者は多い。だが、これらの形式によって、動詞語彙のどの面がどのように転換されているのか、という点については必ずしも明らかにされてきていなかった。

1.2 「つ」「ぬ」「り」「たり」 - 「文法化」の議論の現状

アスペクト形式として位置づけられる「つ」「ぬ」「り」「たり」は、ヴォイス形式に比して、通常の複語尾として扱われることが多いが、やはり、典型的な複語尾(テンスやモダリティに関わるもの)に対して、文法形式になりきれていない面があることが指摘されてきている。特に、「つ」「ぬ」は「完了」(動きの完成)を表す形式、と言って良さそうだが、「完了」「継続」を表す際につねに「つ」「ぬ」が用いられるという訳でもない。

こうした問題に関連して、これらの述語形式と語彙的なものとの交渉を語る研究は多く、近年の「文法化」という観点からこれらを位置づけようとする研究も、この点に注目したものとと言える。だが、その多くは、証明しようのない語源論の域を出ていないように思われる(「り」「たり」が存在動詞からの「文法化」によって生じたというのは正当かもしれない)。そのような研究状況の中で、吉田茂晃「完了」の助動詞考(1992)同「存続」の助動詞考(1993)が、これらの形式の接尾語性を指摘している点が注目されるが、その後の展開はなされていない

1.3 述語体系への位置づけ

古代日本語の複語尾の出現順序に一定の規則があることは山田孝雄『日本文法論』以来注目がなされて来ており、動詞に近い位置で出現するものほど客観的な内容を、文末に

近い位置で出現するものほど主観的な内容(話し手の内容に対する把握)を、それぞれ表す傾向があることが知られている(概観として北原保雄『日本語助動詞の研究』1981など)。注目されるのは、ここで問題にするヴォイスやアスペクトの形式が、相互承接順位でも上位にあらわれることである。

このような点にも動詞の語彙的な特性を転換する形式として「(ら)る」「(さ)す」と「つ」「ぬ」「ふ」「り」「たり」とともに接尾語に連続するものとして扱うことの妥当性が表れているといえようが、個々の振る舞いの違いにも注目せざるを得ない。

上位	相互承接順位		下位
()	()	()	()
(ら)る	未然形	ず	む・まし・じ
(さ)す	終止形	べし	らむ・らし
ふ	連用形	つ・ぬ・り・た	けむ・けらし
		り	けり・き

上に研究代表者が当初考えていた述語形式理解を図示したもの(現在も大きくは変わらない)を掲げたが、ここでも、アスペクトに関わると見られる「つ」「ぬ」「ふ」「り」「たり」についても、()()のあいだで位置づけが揺れることが分かるし、右図で()に位置づけた「つ」「ぬ」「り」「たり」の間でも、文法形式としての定着度は異なっているようである。こうした述語の体系把握との整合も詰める必要があった。

一方、「つ」「ぬ」などは相互承接順序では上位にあらわれる一方、文末にあらわれて話し手の判断を表すように見えることがあるわけだが、同じような問題は、打消しの「ず」や「べし」にも指摘できる。両者(くくって中間的複語尾)は、一つにくくれるものなのか、そうした点も追及する必要があった。

2. 研究の目的

2.1. 中間層複語尾の位置付け

以上のような問題意識から、研究代表者は、「り」「たり」を動作動詞を存在動詞化する語尾から発達したものとして、「(ら)ゆ」「(ら)る」を他動詞を自動詞化する語尾を出発点として用法と上接する動詞を拡大する過程にあるものとして、それぞれ位置づける理解の方向を示唆してきた。

本研究は、このような把握を延長し、これらの述語形式の始発に左のようなものを考え、その上で、より文法的なものへの展開を考えたい。(特にこれまで扱ってこなかった形式を中心に、)個々の形式が語彙的な性格が強い段階(上接動詞の種類など制限も強

い)から、より文法的な段階への展開を跡づけることを目指した。

2.2. 文法化研究への寄与

上でも述べたが、近年の文法変化の研究は、一般理論で提示された用語で、伝統的な研究の主張(証明しようのない語源説もふくむ)を言い換えているだけのものが多い。そうした状況から脱却するためには、個々の形式の変化の観察を精緻化することが必要であり、本研究は、このような問題意識の実践となること、また、「文法化」研究の対象を文法カテゴリそのものの生成のような現象にまで広げていくことを目標とした。

一方、本研究は、助動詞として扱われて来た形式(本研究では複語尾)を、語彙的な側面の多いものから文法的な側面を強めたものに至る段階の中に位置づける作業である、ということも出来る。古典文法(特に上代・中古のそれ)の体系が、必ずしも一枚岩で固定的なものではないこと、個々の形式によって、文法形式化の度合いが異なることを確認することによって、文法記述を、従来の静的なものからより動的なものに転換していくプロジェクトの端緒となることを目指した。

3. 研究の方法

研究方法そのものは、伝統的かつオーソドックスなものであった。ただし、理論的な研究(「文法化」研究や類型論的なものもふくむ)との整合性を考えていること、あとの時代との整合性がとれるような述語体系の記述の枠組を作ることを最終目的としていることもあり、理論的な検討に(も)重点が置かれる点が特徴となる。研究の整理と検討(a 理論的研究 / b 記述的研究)用例の採取と整理、を柱とした(については、目に見える成果にはつながらなかったが、他の成果に結びついており、また、研究代表者の今後の研究にも活かされるはずである)。

まず、語彙と文法とのかかわりを問題にするためには、言語一般に関する知見を参照する必要がある。そこで、日本語にかぎらず、文法化研究、類型論研究、また、研究の方法論について広く検討を行い、古代の日本語にどこまで適用できるものかを考察していった(=上記 a)。とくに、歴史的研究にかかわるものとして、文法化研究の検討については力を入れた。

一方、古代日本語の文法については、記述的研究の蓄積は(質量ともに)高い。そこで、本研究で問題にある個々の形式の記述的な研究について、検討をおこなった(=上記 b)。

また、語学の研究である以上、そのような抽象的な検討だけでは何もできない。そこで、問題した形式(とくに「けり」基本形など)

について、用例の採取と検討をおこなった(=上記)。

4. 研究成果

4.0. 概要

2で述べたような目的にもとづいてはじめられた本研究の成果は、三つに分かれる。第一は、述語形式(複語尾)の体系の中で、(出現する性格の上でも)中間的な位置にあらわれる形式に対する位置づけ(理解)であり、第二は、であり、第三は、それぞれ具体的に見ていこう。

4.1. 中間的複語尾の位置付け

1.3で触れた中間的複語尾「つ」「ぬ」「たり(り)」「べし」「ず」については、次のような結論を得た。

まず、同じく中間的な複語尾といっても、「べし」「ず」(第一種)と、「つ」「ぬ」「たり(り)」「ぬ」(第二種)は別種と捉える必要があると考えられる。

第一種の中間的複語尾は、叙法(話し手の文によってあらわされる事態の把握のあり方)の体系に位置を持つものであり、「む」「らむ」「けむ」「き」など、最文末にあらわれて話し手の判断を表すと考えられる複語尾(文の統覚にかかわる複語尾)に近いものであって、非現実の事態を表す。しかし、見方によって、現実のあり方を表すと理解することもでき、そのかぎりでは、他の複語尾をさらに後につづけることができるものと考えられる。

それに対して、第二種の中間的複語尾は、むしろ動詞語尾との関連が強く指摘される点で、「(ら)る」「(さ)す」などの複語尾(動詞の表す属性的な内容の転換に関わる面を持つ複語尾)に近い面を持つ。「(ら)る」「(さ)す」などと「つ」「ぬ」「たり(り)」とがともに、動詞の表す属性を変更するはたらきを持つ「属性転換語尾」とでも呼ぶものを前身として持ち、そこから複語尾に転換したものととらえることとした。動詞は、一面で名詞項を結び付ける働きを持ち、一方、動きや状態を表すことから、このように考えることによって、「属性転換語尾」を前身として持つ形式がヴォイスやアスペクト・パーフェクトにかぎられることも説明できる。

以上のような二種の中間的複語尾についての位置付けの議論によって、1.2.で述べた見通しを確認しつつ、さらに補強したことになる。これまでに問題が意識されながら、きちんと議論がなされてこなかった問題に、理論的な位置づけをあたえることが出来たと考える(具体的には、5の〔図書〕として論文化した)。

4.2. 複語尾の変化と体系

本研究では、具体的な複語尾の変化と、それが文法体系全体とのかかわりについても

考察を行った。具体的には、源氏物語の「けり」の用例を検討し、「けり」の様相とその学説史について、以下のごとき見通しを得ることが出来た。

中古の「けり」については、「現在につながる過去」とそれに連続する用法、「伝聞によって得た知識として過去」を表す用法、「物語の語り(地の文)」の中で物語世界に話し手が介入することを表す用法とが区別できるが、三つのどれを強調するかによって、これまでの「けり」に関する学説は整理できる。

「けり」の用法としては、が古く、また、語構成からも、先行研究の知見からも、過去を表す形式として、「けり」は「き」よりも古いと考えられる。「けり」は、のような用法から用法を広げて、新たに過去形式化したものと考えられる(このような拡張の過程は、前項で第二種の中間的複語尾として挙げた「つ」や「たり」のその後の用法変化にも指摘できることである)。

このような理解を行い、また、さらに、述語体系の変化(以前、研究代表者自身が「らし」の古語化にまつわって想定した変化の原理)と結び付けて考えることによって、中古における「けり」の用法の広がり(~)についても説明がつけられる。

~ は、いずれも、過去としては、特殊な領域に位置づけられる。「けり」が過去形式化するにあたって、既に「き」は過去形式としてあり、勢力を保っていた。そのような体系に、後から過去形式として参入した「けり」は、特殊な領域を担わざるを得なかった。結果、「き」が「普通の過去」を表す形式として、「けり」は、厳密には過去とは言えない(パーフェクトと呼ぶべき)のような用法もふくめて、「特殊な過去」を表す形式として、理解されることになったものと考えられる。

この研究成果は、そのものとしては、個別の形式に関するものだが、これまでの研究代表者の研究とあわせ、その他の文法形式の変化や、文法体系の全体の変化への理解に示唆するところは大きい。

具体的には、5の〔学会発表〕として、見通しを公表した。ただし、上代の「けり」の様相、「き」の用例の調査など、まだ不十分な点が残っていることが自覚され、研究機関中に論文化には至らなかった。

4.3. 基本形の問題とその課題(中間的複語尾との関係で)

第三の成果は、4.1.で第二種の中間的複語尾として挙げた「つ」「ぬ」の用法(使われ方)の検討の過程で、それにまつわって生じた問題である。1.2.でも触れたように、「つ」「ぬ」は、ひとまず「動きの完成」を表すと理解してよいように見えるのだが、「動きの完成」を表す時につねに「つ」「ぬ」が用いられるわけでもない、という問題がある。

その点について、一方では、4.1.の議論(屬性転換語尾から発展した形式であるという理解)が説明を与えてくれそうに見えるが、一方で、「つ」「ぬ」に対立しつつ、「つ」「ぬ」が用いられない際には「完成」を表すようにも見える動詞の基本形の検討が必要になったわけである。そこで、運動動詞基本形について検討をおこない、その性質と学説史に関して、次のような結論を得た。

動詞の基本形については、いくつかの立場が存在してきたが、どのような立場であれ、その述語形式としての消極性を強調する点では共通している。しかし、消極性と呼ばれてきた性質そのものが、二面性を持っている。一つは「有標」の形式に対する「無標性」であり、もう一つはそもそも述語としての色を持たないこと(「無色性」)である。どちらを強調するかによって、基本形の学説史は整理できる。

古代語の運動動詞基本形の実際の用いられ方を検討してみても、基本形の用法そのものが、有標形式との対立の中で意味をもっていると考えられる部分(「動きの進行」や「動きの完成」や「動きの恒常的な成立」と、そもそも無色であることによるのみ説明がつけられる部分(「遂行的描写」など)があり、後者は、非述語用法(「動きの名札」)に連続していることが分かる。

以上のように、これまで注目されてこなかった「消極性」の二面に注目することによって、古代語の運動動詞基本形について、見通しを与えることが出来た。当初の問題であった「つ」「ぬ」との関係については、完全な結論には至らなかったが、有標側に位置づけられる「つ」「ぬ」が完全には「完成」の形式になり切っていなかったため、基本形がそこを支える場合があった、と捉えられよう(この辺りについては、今後の課題とせざるを得ない)。

この成果は、研究代表者が以前に議論したことの延長線上にあるものではあるが、4.1、4.2に述べた成果と合わせて、理解に深みを与えることが出来たと考える。

この三つめの成果について、具体的には、5の〔研究発表〕として見通しを述べ、さらに修正を施して、〔雑誌論文〕として論文化した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

仁科 明、「無色性」と「無標性」—万葉集運動動詞の基本形終止、再考—、日本語文法(日本語文法学会)査読有、14(2)、2014年9月、pp.50-66

〔学会発表〕(計2件)

仁科 明、「中心」と「周縁」—「けり」

について、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語文法の歴史的研究」共同研究発表会、国立国語研究所（東京都立川市）、2012年9月4日

仁科 明、無色性と無標性—万葉集運動動詞の終止形・連体形終止、再考、日本語文法学会第14回大会シンポジウム、早稲田大学（東京都新宿区）、2013年11月30日

〔図書〕（計1件）

青木博史・小柳智一・高山善行（編）、竹内史郎、仁科 明ほか13名（著）、ひつじ書房、『日本語文法史研究 2』、ひつじ書房、査読無、2014年10月、pp.-21-41

6. 研究組織

(1) 研究代表者

仁科 明（NISHINA, Akira）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：70326122